

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著、 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は 発表学会等の名称	概 要
(著書(欧文)) 1. なし				
(著書(和文)) 1. 海の向こうの「移動する子どもたち」と日本語教育	共著	2009年9月	明石書店	川上郁雄編著、共著者：中川智子、河上加苗、森口祐子、山崎僚子、青木優子、三代純平、鈴木由美子、太田裕子、飯野令子。第10章「『文化を越えて人間関係を構築する』日本語教育のための教師研修」(pp. 221-239)を執筆した。「文化を越えて人間関係を構築する」には、考える力や文化に対応する力、日本語のコミュニケーション能力が必要である。教師にはそうした力と共に、教育理念、教授能力、教授活動のための日本語力、自己研修能力が必要であることを示した。これらの教師の力を総合的に育成する教師研修の枠組みとして、5つの項目を提示し、それぞれの項目を実現するための具体的な研修活動例を挙げた。
2. 日本語教育としてのライフストーリー研究—語りを聞き、書くということ	共著	2015年10月	くろしお出版	三代純平編著、共著者：飯野令子、川上侑雄、河路由佳、桜井厚、佐藤正則、田中里奈、谷口すみ子、中野千野、中山亜紀子。第9章「日本語教育に貢献する教師のライフストーリー研究とは」(pp. 248-273)を執筆した。日本語教師のライフストーリー研究の意義はこれまで、他の分野のライフストーリー研究の意義と重ね合わせて考えられ、日本語教育における教師のライフストーリー研究のあり方が議論されることはなかった。本論文では、これまで指摘されてきた教師のライフストーリーを用いた研究の意義をまとめたうえで、日本語教育に貢献する、教師のライフストーリー研究のあり方を検討した。
3. 日本語教師の成長—ライフストーリーにみる教育実践の立場の変化	単著	2017年12月	ココ出版	全278頁。日本語教師のライフストーリーから、従来とは異なる日本語教師の成長観を提示する。日本国内外合わせて33名の日本語教師のライフストーリーの中から、5名のライフストーリーを選んで解釈し、考察している。5名は、インタビュー当時は欧州在住であったが、それ以前は日本や他の国での日本語の教授経験もあった。欧州の母語話者日本語教師というくくりではなく、世界中を移動する日本語教師の一例として、読者と関係を結び、共感と振り返りをもたらす内容である。

4. 日本語を教えるための教授法入門	共著	2021年12月	くろしお出版	深澤のぞみ・本田弘之編著、飯野金子・笹原幸子・松田真希子著。「第9章テストの目的と作り方を考えよう」(pp. 137-151)と「第10章評価の全体像を考えよう」(pp. 153-164)の計2章の執筆と、コラム2編(p. 13、p. 152)を担当した。大学等で日本語教育を学び始めた人が、学習者にどんな教え方をすればよいかを理解し、自分自身の教授法を考えていける教師になることを目標にした書籍である。日本語教授法の理念や知識を授業に「実装」できる教師の育成を目的としている。
(学術論文(欧文)) 1. なし				
(学術論文(和文)) 1. 日本国外の初等中等教育段階における「人間教育」としての日本語教育のための教師研修	単著	2005年3月	早稲田大学、全115頁	全115頁。日本国外の初等中等教育段階の日本語教育の目的を「人間教育」とし、それは、日本語教育を通して子どもたちが「文化を越えて人間関係を構築する」力をつけることであると捉えた。その実現に向けて、どのような教育実践を設計すればよいかを具体的に示した。さらにそうした教育実践を設計するための教師研修のあり方を、赴任していた中国の初等教育を例に、具体的に検討した。 (修士論文)
2. 日本語教師のライフストーリーを語る場における経験の意味生成—語り手と聞き手の相互作用の分析から—	単著	2010年6月	『言語文化教育研究』第9号、pp. 17-41	日本語教師のライフストーリー・インタビューの場では、聞き手である筆者との相互作用によって、語り手である教師の経験が語りとして引き出されるのみならず、語り手も意識していなかった経験の新たな意味生成が行われる。その過程をデータの分析から具体的に示し、日本語教師のライフストーリー研究が、それに関わる教師の認識や実践の変容の可能性、つまり教師の成長支援の可能性を内包することを指摘した。 (査読有)
3. 日本語教師の成長としてのアイデンティティ交渉—日本語教育コミュニティとの関係性から—	単著	2012年7月	『リテラシーズ』11、くろしお出版、pp. 1-9	教師の成長を教師個人の内面の変化とせず、社会的な関係性の中で捉えるため、教師のアイデンティティに注目し、その捉え方を検討した。そして、3名の日本語教師のライフストーリー研究から、日本語教育コミュニティとの関係性による教師のアイデンティティ交渉が、すなわち教師の成長となることを示した。さらにそれが、教師の実践の発展、ひいては日本語教育の発展にもつながることを指摘した。 (査読有)

4. 日本語教師の成長の再概念化—日本語教師のライフストーリー研究から—	単著	2012年7月	早稲田大学、全232頁	本研究では、日本語教師の成長を、教師を取り巻く他者や事物との社会的な関係性の中で捉える立場に立ち、教師の移動と、コミュニティとの関係性から成長を捉えることを試みた。それによって教師の成長が、他者との関係性によって現れる教師のアイデンティティと深くかかわることを指摘した。そして、5名の日本語教師のライフストーリーを分析・考察することから、その成長過程を具体的に示し、これまでの教師の成長という概念を見直した。 (博士論文)
5. 教師の年少者日本語教育実践の経験が日本語教育全体に影響を与える可能性—教師の成長との関係から—	単著	2013年5月	ジャーナル「移動する子どもたち」—ことばの教育を創発する—第4号、pp. 43-65	教師の成長を捉える視点をもとに、年少者日本語教育の実践経験を持つ5名の日本語教師のライフストーリーの解釈を記述し、横断的に考察した。その結果からいずれの教師も年少者日本語教育の実践経験をきっかけに学習者の「学びへの注目」が起こり、他の教育実践にも変化を起こしていること、それはすなわち日本語教育全体に影響を与える可能性であり、それが教師の成長にもつながっていくことを述べた。 (査読有)
6. 日本人学生の留学経験の意味づけ—派遣留学を担当する大学教職員ができること—	単著	2019年2月	ウェブマガジン『留学交流』2019年2月号、日本学生支援機構、pp. 19 - 25	本稿は、大学において海外留学を希望する学生が少ないこと、また、留学を経験した学生がその経験を、後の学生生活や進路に有効に生かしていないという問題意識にたっている。これらの留学を取り巻く問題を解決するため、留学経験のある学生のライフストーリーを聞きとり、分析した。その結果、学生が筆者と共に紡いだ語りによって、留学にも学生生活にも胸を張り、卒業後も就職先で自信を持って生きていくための軸が形成されたことがわかった。教職員の働きかけによって、こうしたストーリーを生成する場を作ることが、留学経験者を支援し、経験者の語りを他の学生に伝え、ひいては留学する学生を増やすことにつながると考えられた。 (査読無)
(紀要論文) 1. 中国遼寧省の小学生用日本語教材制作について—海外での日本語教材制作のあり方—	共著	2004年3月	『日本語国際センター紀要』第13号、国際交流基金日本語国際センター、pp. 87-104	篠崎節子・飯野令子・曾麗雲共著。日本からの派遣教師と中国の日本語教育関係者が連携し、遼寧省の小学生用の日本語教材を制作した。それと並行して教育現場で、教材の試用版の使用や教師研修も実施し、教材の制作に現場教師の声も取り入れていった。その過程をもとに、海外での日本語教材制作のあり方を考察した。共同研究のため担当部分抽出不可能であるが、教材の試用状況や教師研修の部分については中心的に担当した。 (査読有)

2. 日本語コースにおける教師の学習—教師の参加の深まりと日本語コースの発展—	単著	2009年3月	『国際交流基金日本語教育紀要』第5号、pp. 33-48	状況論の視点から見ると、教師が有能になるためには日本語コースの物理的・社会的状況がいかに組織され、教師の参加をいかに深くしていくかが課題となる。そのため、担当した日本語コースについて、参加する講師を取り囲む物理的・社会的状況を記述し、講師の日本語コースへの参加の実態を分析した。そこから、講師の参加を深めるための方策を検討し、それがコース全体の発展にもつながることを示した。 (査読有)
3. 日本語教師の「成長」の捉え方を問う—教師のアイデンティティの変容と実践共同体の発展から—	単著	2009年5月	『早稲田日本語教育学』第5号、pp. 1-14	1人の日本語教師のライフストーリーを、正統的周辺参加を枠組みとして分析し、教師の実践共同体への参加の深まり、つまりアイデンティティの変容を追った。また、教師が参加した実践共同体を活動理論の枠組みで記述し、教師のアイデンティティの変容を実践共同体の発展との関係から捉えた。それらによって、これまでとは異なる視点で、教師の「成長」の軌跡を捉えることを試みた。 (査読有)
4. 多様な立場の教育実践が混在する日本語教育における教師の「成長」とは—教師が自らの教育実践の立場を明確化する過程—	単著	2011年2月	『早稲田日本語教育学』第9号、pp. 137-157	日本語教師は多様な立場の実践の混在の中を「移動」するため、実践の立場の枠組みを越えて「成長」を議論する必要がある。その「成長」とは、個々の教師が「移動」の過程で、言語観・言語学習観を意識化し見直して、それに基づく実践の目的、その中での学び、学びを起こす参加者の関係性を意識化して実践を設計することである。その具体例として、2名の日本語教師のライフストーリーを分析・考察した。 (査読有)
5. エンパワメント評価実践においてエンパワメント文脈はどのように高められたか—当事者意識に着目して—	共著	2013年12月	『富山大学杉谷キャンパス一般教育研究紀要』第41号、pp. 89-106	中河和子・鎌田倫子・飯野令子共著。富山大学医薬系杉谷キャンパスの留学生への日本語教育プログラムにおいて実践しているエンパワメント評価について、その導入の経緯と実践の概略を述べた。特にエンパワメント評価の実施にはプログラムがエンパワメントを必要とし、希求するというエンパワメント文脈の存在が不可欠である。当該プログラムにおいて、プログラム関係者をエンパワメントするために取った方略と、現在までの結果について考察した。共同研究のため担当部分抽出不可能。 (査読有)

<p>6. 外国人学生が日本の大学生成功するための環境づくり—日本語教員の役割を考える</p>	<p>単著</p>	<p>2016年3月</p>	<p>『常磐国際紀要』第20号、pp. 281-290</p>	<p>本稿では、まず先行研究から、外国人学生が留学生対象科目だけで日本語力を向上させ、日本の大学での成功を得るのではなく、大学内外の日本社会とつながり、人間関係を構築することによって、日本語を学び、日本の大学での成功もあることを示した。そうした考えにもとづいて筆者が、本学の学部1年に入学したアジア系の留学生に対しておこなった環境づくりを紹介した。そして、留学生の日々の観察と、春学期末に留学生を対象に実施したインタビューから得られた反応を分析する。それらをもとに、今後の、外国人学生の日本の大学での成功を導く日本語・日本事情科目のあり方、および日本語教員の役割を検討した。同タイトルで学会発表し、得られた意見などをもとに考察を深め、論文としてまとめた。 (査読無)</p>
<p>7. 日本語教育におけるナラティブ研究の可能性</p>	<p>単著</p>	<p>2018年3月</p>	<p>『常磐大学人間科学部紀要 人間科学』第35巻2号、pp. 1 - 13</p>	<p>本稿では、これまでの日本語教育におけるナラティブ研究の全体像を明らかにする。特に近年、日本語教育におけるナラティブ研究の中で最も盛んに行われているライフストーリー研究では、社会学と心理学のライフストーリー研究の相違点を明確にする。そのうえで、これまでの日本語教育におけるナラティブ研究を分析する。その考察から、今後、日本語教育をさらに発展させる、ナラティブ研究のあり方を提言する。 (査読無)</p>
<p>8. 外国人学生のライフストーリー・インタビューから指導の方向性を探る—ナラティブを「行為」として捉えることによる可能性—</p>	<p>単著</p>	<p>2019年3月</p>	<p>『常磐大学人間科学部紀要 人間科学』第36巻2号、pp. 1 - 14</p>	<p>筆者は大学の留学生対象科目を担当しはじめた当初から、外国人学生の指導方法を模索してきた。その方法として、外国人学生のライフストーリー研究が有効ではないかと考えた。ライフストーリー研究において、ナラティブを「行為」として捉えることは、学生をより理解し、筆者の今後の行動を検討できるからである。本稿では本学の一人の外国人学生のライフストーリーを聞き取り、そのナラティブを「行為」として捉えた。分析の結果、外国人学生の経験とそれに対する認識を理解できた。加えてナラティブは、外国人学生と日本語教員が共に外国人学生の未来を見据え、両者のその後の行動を検討する材料となった。 (査読無)</p>

<p>9. 日本語ボランティアと研究者が共に歩む地域日本語教育へーボランティア日本語教室の新たな価値を創造するー</p>	<p>単著</p>	<p>2019年9月</p>	<p>『常磐大学人間科学部紀要 人間科学』第37巻1号、pp. 1-14</p>	<p>本稿では、研究者である筆者が、日本語ボランティアと研究者の不均衡な力関係を意識化したうえで、日本語ボランティアと筆者との間に現れる、日本語ボランティアの自己認識、すなわちアイデンティティを理解することを試みた。その際、筆者も研究対象として分析に加え、筆者が日本語ボランティアに与える影響についても考察した。方法として、日本語ボランティアにグループインタビューを実施した。その分析から、地域日本語教育の実践者である日本語ボランティアと研究者との間にある認識のずれを解消し、両者が同じ視点に立って、よりよい地域日本語教育に向かうために、研究者が何をすべきかを検討した。 (査読無)</p>
<p>10. 派遣留学生の経験を理解し今後の指導につなげるー学生のライフストーリーの聞き取りを中心にー</p>	<p>単著</p>	<p>2020年9月</p>	<p>『常磐大学人間科学部紀要人間科学』第38巻、第1号、pp. 1-16</p>	<p>本学の教職員が、学生の留学を阻害する要因を取り除くために、どのような働き掛けを行っていくか、そして留学経験者や留学志望者をどのように指導していくか検討することを目的とした。2018年度派遣留学生7名のライフストーリー・インタビューの録音データおよび、留学振り返りシートの記述を、先行研究で提示された5つのカテゴリー、(1) 異文化間能力・外国語運用能力、(2) 学業、(3) 社会性・人としての成長、(4) 雇用され得る能力、(5) 社会貢献、を視点に分析した。その結果から、留学へ向けた学生指導と留学志望者増加の方策を提案した。 (査読無)</p>
<p>11. 18名の学生はなぜ留学したのかー派遣留学生へのインタビューからー</p>	<p>単著</p>	<p>2022年3月</p>	<p>『常磐大学人間科学部紀要人間科学』第39巻第2号、pp. 75-83</p>	<p>本学では海外留学が奨励されていても、志望する学生が少ないことが課題である。その解決策の一つとして、これまでの派遣留学生たちの留学に至る経緯や置かれた環境などを調査し、なぜ留学したのかを明らかにすることを試みた。2015年度から2019年度までの派遣留学生18名に、留学経験のみならず、幼少期から留学に至る経緯、留学後までのライフストーリーを個別のインタビューで聞き取った。その結果から、本学学生の特徴とそれに合わせた、留学促進のための教職員の行動を提案した。 (査読無)</p>
<p>(辞書・翻訳書等) 1. なし</p>				

<p>(報告書・会報等)</p> <p>1. 世界に夢架け—青年海外協力隊員の活躍—</p>	共著	2002年	北日本新聞社、pp. 29-38	富山県出身の青年海外協力隊員の海外での活動を紹介した書籍である。中国湖南省の大学に日本語教師として赴任し、その現地レポートとして「唐辛子と日本語と毛沢東」を執筆した。
<p>2. 日本語教育を学ぶ—その歴史から現場まで—</p>	共著	2006年	三修社、pp. 166-167	遠藤織枝編の書籍内で、ハンガリーの日本語教育の現状を紹介した。運営を担当していた一般成人向けの日本語コースの現状を報告する「ハンガリーの日本語講座」を執筆した。
<p>3. 世界の日本語教室から</p>	共著	2009年	アルク、pp. 104-107	国際交流基金の派遣で海外に赴任した日本語教師が、現地での活動を紹介した書籍である。ハンガリーの首都ブダペストで一般成人向けの日本語コースを運営した経験を、「ハンガリー 学びたいものを自ら選び、とことんやる、天才を生む教育風土」として報告した。
<p>(国際学会発表)</p> <p>1. 中国遼寧省小学生用日本語教材制作と教師研修との連携—中国の初等教育段階の授業のあり方—</p>	単独	2004年8月	2004年日本語教育国際研究大会(昭和女子大学)	中国遼寧省での小学生向け日本語教材の制作と、その教材を使用する教師たちを集めて行った研修、および現場での教材の試用状況を報告し、現場の教師の意見や子どもたちの反応をもとに、中国の小学校での日本語の授業のあり方について考察した。(予稿集あり)
<p>2. ビジターセッション設計の視点—すべての参加者が学ぶために—</p>	単独	2005年9月	第2回ブルガリア日本語学・日本語教育シンポジウム(ソフィア大学)	国際交流基金ブダペスト事務所の日本語講座で実施したビジターセッションについて報告し、日本語学習者とビジターである日本語母語話者の両者にとって学びのあるビジターセッションのあり方を考察した。(論文集あり)
<p>3. ハンガリーの日本語学習者の特徴と日本語コースの方向性—ブダペストの一般成人向けコースを例に—</p>	単独	2006年8月	第19回日本語教育連絡会議(リュブリャナ大学)	運営を担当した国際交流基金ブダペスト事務所日本語講座の受講者の特徴を、学習者へのアンケート調査を中心に分析し、ハンガリーにおける日本語コースの方向性について考察した。(論文集あり)
<p>4. 教師の「成長」を促すコース運営—ハンガリーにおける一般成人コースを例に—</p>	単独	2006年9月	第11回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム(ウィーン大学)	国際交流基金ブダペスト事務所の日本語講座が、ただ受講者が日本語を学ぶだけでなく、授業を担当する教師たちの成長にもつながるように、その運営方法を検討した。(論文集あり)

<p>(国内学会発表)</p> <p>1. 「人間教育」としての日本語教育のための教師研修—中国小学校日本語教師研修会を例に—</p>	<p>単独</p>	<p>2004年10月</p>	<p>2004年度日本語教育学会秋季大会 (新潟大学)</p>	<p>日本国外の初等中等教育段階の日本語教育の目的を「人間教育」とし、それが実現できる教師を育成するための教師研修の内容を、中国の教育現場を想定して提案した。(予稿集あり/学会誌『日本語教育』に要旨掲載)</p>
<p>2. 成長する日本語教師を読み解く—ライフストーリーの分析から—</p>	<p>単独</p>	<p>2008年3月</p>	<p>早稲田大学日本語教育学会2008年春季大会 (早稲田大学)</p>	<p>ヨーロッパ在住の1名の母語話者日本語教師のライフストーリーを聞き取り、そこから日本語教師の成長過程を捉えることを試みた。(予稿集あり)</p>
<p>3. 「教師の主体性」の出現—「学習者の主体性」が保障されるとき—</p>	<p>単独</p>	<p>2008年10月</p>	<p>2008年度日本語教育学会秋季大会 (山形大学)</p>	<p>日本語学習者に主体的な学びが起きるのは日本語教師が主体的に学びを起すための実践を行う時であり、それは教師の主体性の現れでもある。教師の主体性と学習者の主体性が表裏一体であることを、先行研究の分析から述べた。(予稿集あり/学会誌『日本語教育』に要旨掲載)</p>
<p>4. 日本語教師のアイデンティティの構築—重層的な実践共同体への参加を通して—</p>	<p>単独</p>	<p>2009年3月</p>	<p>早稲田大学日本語教育学会2009年春季大会 (早稲田大学)</p>	<p>ヨーロッパ在住の3名の日本語母語話者教師のライフストーリーを聞き取り、そこから、複数の実践共同体に参加する日本語教師のアイデンティティの変容過程を読み解いた。(予稿集あり)</p>
<p>5. 日本語教師研修としてのライフストーリー・インタビューの可能性—ライフストーリー・インタビューの実例をもとに—</p>	<p>単独</p>	<p>2012年6月</p>	<p>2012年度日本語教育学会研究集会第3回 (北陸地区) (富山大学)</p>	<p>日本語教師の成長を捉えるために行ってきたライフストーリー・インタビューそのものが、教師の成長につながるかどうか、教師の成長の枠組みをもとに分析し、その可能性と限界を考察した。(予稿集あり)</p>
<p>6. 外国人学生が日本の大学生成功するための環境づくり—日本語教員の役割を考える</p>	<p>単独</p>	<p>2015年8月</p>	<p>留学生教育学会第20回年次大会 (日本電子専門学校)</p>	<p>本発表では、近年の日本語教育の先行研究をもとに、外国人学生の成功のためには、大学内外の外国人学生を取り巻く社会的な環境との相互作用が重要であることを示した。その具体例として、日本語教員である発表者が実践した外国人学生のための環境づくりの過程を述べた。また外国人学生へのインタビューを実施し、その環境が外国人学生に与えた影響について検証した。その結果から、外国人学生のための環境づくり、それと連動した日本語の授業のあり方も含めた、日本語教員の役割を提案した。(予稿集あり)</p>

7. ボランティアの視点から地域の日本語教室を捉える—グループ・インタビューでのアイデンティティ交渉	単独	2017年5月	2017年度日本語教育学会春季大会（早稲田大学）	本研究は地域の日本語教室を運営するボランティアが、日本語教室やボランティアとしての自分自身をどのように認識しているか、ボランティアの視点から捉えるものである。その方法として、グループ・インタビューの場でボランティアがアイデンティティを交渉する過程を明らかにする。その結果から、ボランティア自身による日本語教室の今後の発展の可能性と、それに寄り添う研究者のかかわり方を見いだした。（予稿集あり／学会誌『日本語教育』に要旨掲載）
8. 外国人学生のナラティブを「行為」として捉える意義	単独	2018年3月	言語文化研究学会第4回年次大会（立命館大学）	本研究では外国人学生のライフストーリーが、聞き手である日本語教員との共同生成であると考え、ナラティブを「行為」として捉える。そのため研究者も分析対象とし、日本語学習者と研究者のその後の行動を視野に入れた考察を行う。その結果から、外国人学生のナラティブを「行為」として捉える研究が、外国人学生の経験を聞き取り理解するだけではなく、外国人学生と日本語教員が共に外国人学生の未来を見据え、両者のその後の行動を検討する材料となることを示す。（予稿集あり）
9. 海外留学を経験した日本人学生の英語学習への意味づけ—大学で派遣留学を担当する教職員ができること—	単独	2018年9月	留学生教育学会第23回年次大会（広島大学）	海外留学が特別なことではなくなった現在、留学したからといって、必ずしも海外と直接関係のある仕事や語学を生かす仕事に就けるわけではない。それは学生たちにとって、語学学習の意味、留学の意味への大きな迷いとなっている。本発表は、地方都市の小規模な私立大学で英語を専攻し、海外留学を経験した一人の女子学生に、卒業前に行ったライフストーリー・インタビューを分析した結果である。女子学生は教員である発表者とのやり取りの中で、英語学習や海外留学の意味を見つけていく。こうした語りを生成する場を作ることが、学生の迷いを解消する、教職員の支援の在り方の一例となることを示した。（予稿集あり）
10. 留学の5つのインパクトの検証と今後の留学指導—日本人学生へのライフストーリー・インタビューから—	単独	2019年8月	留学生教育学会第24回年次大会（赤門会日本語学校）	本発表は、地方都市の私立大学で、2018年度に派遣留学を経験した日本人学生7名のライフストーリー・インタビューをもとにしたものである。分析の視点として先行研究から、留学のインパクトに関する5つのカテゴリーを参照する。その考察から、大学教職員が、学生自身の経験の意味づけを理解したうえで、さらに「社会貢献」の視点を持って指導することを提案する。（予稿集あり）
(演奏会・展覧会等) 1. なし				

(招待講演・基調講演) 1. 日本語教師のライフストーリーを読み解く	単独	2013年12月21日	立命館大学多文化共生をめざす日本語教育プロジェクト公開ワークショップ	立命館大学で日本語教育を専攻する大学院生、大学院修了生、日本語講師を対象に、日本語教師の成長研究におけるライフストーリー研究の有効性と、その方法論の特徴を、先行研究から述べた。そして、講演者がこれまで日本語教師のライフストーリーをどのように解釈してきたか、その視点がどのように生まれたか、そこから見えてくる日本語教師の成長とは何かを述べ、日本語教育におけるライフストーリー研究の意義を参加者と共に検討した。
2. 日本語教師のライフコース	単独	2019年8月5日	金沢大学 国際学類 日本・日本語教育コース	金沢大学で日本語教育を専攻し、日本語教師を目指す学部生・大学院生に向けて、講演者自身の日本語教師としてのこれまでの経験を語り、また、日本語教師の研究の経緯と成果を講演した。学部生からは、日本語教師を職業として身を立てていく上での疑問や不安についての質疑応答、また、大学院生からは講演者が過去に研究発表した地域日本語教育の研究についての質疑応答があり、学生のレベルに応じた、議論を行った。
(受賞(学術賞等)) 1. なし				

研 究 活 動 項 目

助成を受けた研究等の名称	代表、分担等の別	種 類	採択年度	交付・受入元	交付・受入額	概 要
(科学研究費採択) 1. ボランティア日本語教室における継続的内容改善と持続可能な運営システムの構築	代表	若手研究	2019年度～2021年度		143万円	本研究は、茨城県水戸市で開設されている「生活者としての外国人」のための複数のボランティア日本語教室が、研究者および水戸市国際交流協会と共に、内容面の継続的改善と持続可能な運営を可能にする、「水戸システム」を構築するものである。本研究の特色は、これまで文化庁や地域日本語教育研究者の提案には入れられず、先進的な取り組みから切り離されてきた、「学校型」の教室活動を続ける既存のボランティアとの協働により、共に新規ボランティアを育成しながら、既存のボランティアにも活動内容の変化を求めることである。
(競争的研究助成費獲得(科研費除く)) 1. なし						

(共同研究・受託研究受入れ) 1. なし						
(奨学・指定寄付金受入れ) 1. なし						
(学内課題研究(共同研究)) 1. なし						
(学内課題研究(各個研究)) 1. 海外留学・研修プログラム参加学生の海外体験の意味づけに関する研究	代表	学内課題研究助成	2018年度～2020年度	—	120万円	派遣留学等の参加学生への調査をもとに、海外体験の必要性、有用性を示し、本学学生の海外プログラムへの参加者を増加させること、そして本学学生にとって有益で魅力的な海外体験へ向けて、本学主催のプログラムの改善・開発を行っていくことを目的とする。そのために、学生自身の視点から海外プログラム参加のきっかけや、海外体験の意味づけを、その背後にある学生の生育歴や生活環境も含めて調査し、長期的な視野から体験の意味づけの変化を探る。
2. 茨城県における地域の日本語教室のボランティアと研究者との協働性の構築	代表	学内特別奨励研究助成	2018年度	—	33万9千円	「生活者としての外国人」を対象として行われている地域日本語教育には、研究者等の専門家と、現場で実践を担う日本語ボランティアとの間に大きな分断がある。地域日本語教育の発展のためには、両者の協働は不可欠である。本研究では、茨城県内のボランティア日本語教室の実態調査および、そこで活動する日本語ボランティアへの聞き取り調査を行う。それをもとに、ボランティアと研究者が対等な関係で協働性を構築し、茨城県の地域日本語教育の改善と発展のための取り組みを行うことを目指す。
(知的財産(特許・実用新案等)) 1. なし						